審 査 講 評　第13回 日本水大賞委員会　審査部会長　虫明功臣

日本水大賞は、今回第13回を迎えました。審査部会長として、今回の「日本水大賞」への応募状況ならびに審査・選考の経過についてご報告申し上げます。審査部会は、日本水大賞委員会のもとに各賞の候補を選考するために設けられており、水防災・水資源・水環境・水文化等の分野の専門家や学識経験者18名で構成されています。今回から、従来の「奨励賞」を「未来開拓賞」と改名しました。審査は、「日本水大賞」募集要項に記された「対象の範囲」および「審査基準」を基に進められました。各賞の候補となった活動は、日本水大賞委員会に報告され、審議の結果、“大賞（グランプリ）”をはじめとする日本水大賞の各賞が決定されました。

応募状況

本年の応募総数は157件で、昨年に比べて微増しましたが、引き続き、広報活動を強化し、新たな活動の発掘などを進めてゆく必要があると考えています。応募活動を主体別に見ると、団体が55%、個人が18%、学校が18%、企業が8%、行政が1%となっており、企業からの応募が少し増えましたが、行政からの応募が少なくなっています。活動分野別では、例年とほぼ同様の傾向で、水環境52%、水文化20%、水資源17%、水防災11%となっています。

審査結果：各賞の受賞者と活動名称および審査講評を以下に示します。

○大賞＜グランプリ＞：徳島県　特定非営利活動法人　新町川を守る会

「水辺に人が集まるまちづくり～吉野川をはさんだ水際交流拡大プロジェクト～」

「川を活かした町づくり」として第3回日本水大賞　国土交通大臣賞を受賞されてから10年、行政、企業、県内の様々なNPO団体等と連携・協働を深めながら、「川は使えば、きれいになる」をモットーに“川と地域の再生”に大きな実績を挙げています。具体的には、20年におよぶ河川清掃活動をベースとしながら、無料遊覧船の運航（毎年5万人乗船、障害者が車椅子で上下船出来る福祉の船着き場を実現）、河川沿いの修景活動、365日水辺のにぎわいを意図したラブリバーイベントの企画・実施、吉野川源流との交流活動や川を挟んだ地域間の朝市交流、川に学ぶ体験学習など、ユニークで多彩な活動を継続・発展させています。さらに最近では、昭和初めまで栄えた徳島－鳴門間の「撫養（むや）航路」を復活させ、市民の利用はもちろん観光客の誘致にも貢献しています。

住民が主体となって行政や企業を巻き込むという新町川を守る会の活動は、“河川環境の再生とそれを中心とした街おこし、地域おこし”の模範として、極めて高く評価されます。

○国土交通大臣賞：東京都　特定非営利活動法人　荒川クリーンエイド・フォーラム

「荒川発！主体間連携によるパートナーシップを実現した環境保全活動
～過去16年の軌跡と飛躍する17年目のクリーンエイド～」

活動対象を上流秩父市から東京湾葛西海浜公園東なぎさまで荒川流域全体として、自治体、企業、学校、市民団体などに広範な参加を募って、参加人数が100会場で合計1万人に達するところまで河川清掃活動の規模を広げていることに、まずもって敬服します。拾ったゴミの数を数え、分別し、どこにどのようなものがあったかを記録・集計して、ごみ発生の抑制や環境問題への啓発に結びつけているのが、この清掃活動のユニークな特長です。また、市民の手による水質調査、荒川の自然観察会やエコツアーによる自然体験活動や環境学習の実施、そうした活動を通じての上中下流の交流の促進、ニュースレターやEメールニュースなどによる広報活動、など多彩な活動を展開しています。

こうした地道な活動により流域の多様な主体の連携を図りながら、荒川の環境保全と回復に貢献していることが、高く評価されるとともに、今後の更なる発展が期待されます。

○環境大臣賞：神奈川県　海をつくる会

「日本まるごと海底、湖底、海浜清掃」

この会は、「山下公園海底清掃」として第3回日本水大賞・市民活動賞を受賞されていますが、趣味としているスクーバダイビングを活用して、30年近くにわたり海底や湖底の清掃活動を継続・拡大していることに深く敬意を表します。海底清掃としては、山下公園、若洲公園、熱海、釜石市根浜港・平田漁港・佐須港、横浜トライアスロン大会会場など、湖底清掃としては、芦ノ湖、山中湖、西湖、榛名湖、諏訪湖、木崎湖、野尻湖など、をこれまで対象として、毎回数10名が参加し、数100トンのゴミを回収しています。この活動は、地域の漁業関係者、釣舟組合、市町村、協賛団体と連携して実施されており、ゴミの軽減が図られることを意図して、ゴミの種類と量は記録され連携先へ連絡されています。

「ゴミのない海底、湖底になるまで」を目標として、視界が利かない水底で危険を伴う活動を地道に続け、さらに拡大させていることに頭が下がる思いです。

○厚生労働大臣賞：鳥取県　日野川の源流と流域を守る会

「鳥取県西部域の水源保全・河川文化伝承活動と日野川流域憲章制定の取り組み」

「日本一の激ウマの水道水」と誇りを持つ米子市の水道局職員が中心となって始めた活動は、日野川全体の一斉清掃や日野川最源流域での水源涵養林の取得から川にまつわる歴史や伝統文化の発掘・伝承へと広がり、「日野川の源流と流域を守る会」の設立に繋がります。そして、この会が自治体・行政機関、環境活動諸団体、企業などに広く呼び掛け、流域圏の産官学民33団体の賛同を得て、河川環境の保全や流域文化の伝承の理念を基として地域活性化を目指す「日野川流域憲章」の制定へと発展します。この流域憲章のもとに、ボランティアによる源流水源林の保全、参加団体との共催による各種イベントの開催など、多彩な活動を展開しています。

水供給者が熱意と誇りをもって主導し、日野川流域圏の様々な主体の連携を実現して、水循環健全化の活動を進めていることが高く評価されます。

○農林水産大臣賞：宮城県　ナマズのがっこう

「伊豆沼・内沼および伊豆沼・内沼上流域、周辺水田の自然生態系保全活動」

伊豆沼・内沼とその上流域・周辺水田における在来の魚類や水生昆虫類などの減少と単純化の要因が、沼の水質と低質などの物理環境の悪化、オオクチバスなどの外来魚の増加、そして圃場整備事業に伴う繁殖・生息域の劣化にあるとの認識の基に、それぞれの要因を緩和する対策に総合的に取り組んでいることが高く評価されます。具体的には、冬みず田んぼ（農薬や化学肥料を使用しない農法）の試行と効果の検証、多数存在するため池での外来魚の駆除と在来魚類の放流、そしてメダカ、ドジョウ、フナ、ナマズなどの産卵・生息場である水路と水田を繋ぐ「小規模水田魚道」の設置、を3本の活動の柱としています。特に、小規模水田魚道については、魚種による遡上実績を確認し、設置のし易さ、耐久性と経済性の観点から最も効果的なタイプを決定し、現場に即した設置方法を考案しています。

トキやコウノトリの復元を目指す他県からすでに支援の依頼が来ているそうですが、「ナマズのがっこう」の環境保全型農業へ向けての活動が各地に波及することが期待されます。

○文部科学大臣賞：福井県　福井県立小浜水産高等学校　ダイビングクラブ

「アマモマーメイドプロジェクト」

水産高校ダイビングクラブの10名足らずの学生が主体となって、二酸化炭素の吸収、酸素の供給、底質の改善といった効果を持つとともに海洋生物の産卵場や稚魚の成育場所となるアマモの再生に向けて研究と実践に挑み、約1000m^{2}のアマモ場の再生に成功しています。まず、大学、水産試験場、栽培センター、民間企業などと連携して、従来平均2～3%だった小浜湾産アマモ種子の発芽率を約20%まで向上させた研究成果は、称賛に値します。こうした研究は、水産学会等へ発表され、高い評価を受けています。また、アマモの育苗や定植活動には、市民、商店街、漁業者、小中学校、行政、大学、研究機関、企業などを広く巻き込み（6年間で約1万人が定植活動に参加）、アマモ場再生、そして海洋環境保全への関心と実践活動への参加を啓発している点は、高校生の地域貢献活動として高く評価されます。

○経済産業大臣賞：群馬県　磯村産業株式会社及び磯村豊水機工株式会社

「利根川源流域における100年にわたる水源涵養の森づくり」

総合水処理プラント・機器メーカーと林業に携わるグループ企業が、高崎市内の水道水源である「水源涵養保安林」に指定された会社所有の1,100haの山林を、時にはグループ企業全体で費用を負担しながら、明治以降100年にわたる適切な森林施業と管理を継続し、健全な水源林の維持を図ってこられたことに、敬意を表します。この間に、台風による風水害などの自然災害や第二次大戦後や高度経済成長期の人手不足などによって、植林や保育が困難な時期が多々あったと思われますが、森林を単なる木材生産の場とせず、洪水や渇水や土砂流出を軽減し良質な水質を育む森林の公益的な役割を重視して、県内随一と言われる美林を造り上げています。

良質で安全な水供給システムの提供と浄水場の運転管理というこの企業グループの業務と関連を持ちながら、100年にわたる会社所有水源涵養保安林に対する地道な保全活動を続けてこられたことは、企業の採算を超えた立派な社会貢献活動として高く評価されます。

○市民活動賞：長野県　松代町河川愛護会

「長野市松代町内の河川愛護活動」

昭和33年、34年に発生した大水害を契機に、自治会を主体として設立された、「地域の河川は地域で守る」ことを趣旨として始まった河川愛護会の活動は、50年の長きにわたり継続されています。松代町住民約1万8000人を会員とし、草刈や清掃、水辺動植物の保全など多様な環境保全活動に取り組みながら、同時に河川堤防の危険箇所や修繕必要箇所を把握するなど、地域住民全体の防災意識の向上を目指しています。河川環境の保全活動と水害防止意識の継承とを結びつけたユニークな河川愛護活動として、高く評価されます。

○国際貢献賞：福岡県　紫川を愛する会　We Love Murasaki River (WLMR)

「甦れ!! 魚たち～紫川再生の経験をフィリピンに移転した～」

かつて「死の川」と呼ばれた北九州市を流れる紫川は、行政と市民と企業の連携により、アユの棲む清流へと再生させた経験を持っています。「紫川を愛する会」は、この経験と民間ボランティアとしての水環境改善活動のノウハウ、つまり水環境モニタリング技術や市民参加による水環境改善手法などを、1998年から12年間にわたって、フィリピン、メトロ・セブ地域を流れるブツアノン川流域の環境ボランティア団体や行政機関などへの移転に尽力し、最近では魚が戻ってくるまでに水環境が回復してきました。この活動は、日本の経験を活かした草の根レベルの国際貢献として高く評価されます。

○未来開拓賞：茨城県　つくば市教育委員会

「つくば市ヤゴ救出大作戦」

教育委員会が主導してつくば市内の市街地、住宅地、田園地、山間地など環境が異なるところに立地している37の小学校すべてが参加・交流する「ヤゴ救出大作戦」なる環境学習は、ユニークな地域環境教育として、高く評価されます。これは、各小学校の夏季以外はビオトープ化されたプールでのヤゴや水生昆虫の観察成果についてテレビ会議システムを使って相互に発表し比較することによって、場所や年による環境の変化、ひいてはつくば市全体の環境状況とその変化を理解させようという試みで、これまで9年間に約1万8000人の小学生に水環境について考える機会を与え、将来の環境保全・保護の担い手を育てるのに有効に機能しています。

○未来開拓賞：兵庫県　Blue Earth Project

「女子高生による水環境改善キャラバン」

「女子高生が社会を変える」をキャッチフレーズとして、TAPプロジェクト（レストランのコップ一杯の水に寄付を募りアフリカに井戸を寄贈する世界ユニセフ協会の活動）を高校生自らが関西で初めてプロデュースして300店舗以上を戸別訪問して協力を依頼してきました。また、水環境改善啓発のための各種イベントの開催、企業への節水商品の提案、行政への水事情改善のための行動の提案など、11年にわたって国内外の持続可能な水環境の実現に向けて続けてきた、社会への明るくて活発なアピールを高く評価し、今後の発展を期待します。

○未来開拓賞：沖縄県　沖縄県立宮古総合実業高等学校　環境班

「小さな宮古島の100年後の「命の水」と「食」を守るプロジェクト」

さとうきびから出るバガスを有機堆肥とすることによって地下水の硝酸性窒素を低減させるという宮古農林高等学校（当時）の第6回日本水大賞グランプリの受賞活動を発展させています。さとうきび栽培の空白期間に、沖縄では栽培歴のほとんど無い日本そばを無肥料で栽培する輪作農法を提案・試行し、地下水中の硝酸態窒素の低減を目指しています。宮古島の「命の水」である地下水の水質改善と日本そばというこの地域での新しい食材の開発とを結びつけた環境問題と農家支援、そして地域活性化への取り組みが、より広く普及することを大いに期待しています。

○審査部会特別賞：岩手県　岩手県立宮古工業高等学校　機械科　津波模型班

「津波防災への啓発活動」

宮古湾などこの地域の地形特性に合わせた地区ごとの「津波模型」を合計8台製作し、過去の大津波を想定した「擬似津波実演会」を地域住民の方々あるいは小中学校を対象として、5年間に56回開催して、避難所の確認、避難活動への参加、被災者救援の方法など、地域の防災・減災意識の向上に努めきました。実演回数100回を目標としてこうした啓発活動を継続して行く方針を固めていた矢先の今回の被災、活動を進めて来られた方には複雑な想いがあろうかとお察ししますが、この活動に接して命が助かった人も多いと信じます。今後は、若い高校生の皆さんが、大津波にも安全で活力のあるまちと地域の再建に大いに力を発揮されることを心より期待しています。

○審査部会特別賞：神奈川県　おさかなポストの会

「捨てられる外来種・外来カメに里親を捜し、いのちの川　多摩川を守る活動」

多摩川の種の多様性を乱す飼育熱帯魚の遺棄や外来種の密放流を防ぐため、飼えなくなった魚を預かり、学校や高齢者施設等で里親になってもらう「おさかなポスト」のユニークな活動は、生態系の保全とともに子供たちが命を大切にする心を育む環境教育・情操教育に大きく貢献しています。この「おさかなポスト」の設置とともに、出前講座、川で遊ぶ体験学習、多摩川こどもシンポジウムの開催など、多摩川の魅力を広く市民に発信し、川との付き合い方を伝えることを意図した長年の多彩な活動に敬意を表します。

○審査部会特別賞：静岡県　高橋　和彦・恵子

「佐鳴湖の自然に親しむ会　～夫婦による24年間の環境教育活動～」

結婚以来24年の長きにわたりご夫婦で、全国有数の汚濁された湖、佐鳴湖の水質改善のための啓発活動を地道に続けて来られました。水質改善のためには「流域住民が佐鳴湖の自然に親しみ、佐鳴湖を大切に思う心を育てることが原点」との思いから始めた自然観察会は、2010年9月現在で273回、参加人数は延べ約4000人にのぼります。この観察会を初めとして、小中学校への出前授業、ガイドブックや月刊ニュースの発行、環境調査などを自前で継続していることに敬意を評しますとともに、今後の活動の発展を期待します。

本年も、地域に根ざしたユニークな活動、志と熱意に満ちた活動、地道に継続し成果を挙げている活動、など、など、全国各地から多彩・多様な水に係わる活動の応募がありました。主催者側として大変心強く感じており、応募された皆様に心から感謝申し上げます。

今回の東日本大震災に遭遇して、日本のコミュニティの助け合いの心ときずなの強さ、言い換えれば、コミュニティ力の強さが改めて認識されました。各地から応募された水循環健全化へ向けての活動にも、コミュニティをよりよいものにしようという強い意識と底力が感じられます。この底力を持ってすれば、被災地、そして日本は必ず再興すると、自信と勇気が湧いてきます。

皆様のご尽力に敬意を表しますとともに、安全で美しく活力のある地域の形成へ向けて皆様の活動がますます発展し深化することを祈念して、講評の締めと致します。

審 査 講 評　2011 日本ストックホルム青少年水大賞　審査部会長　千賀裕太郎

賞の概要と応募状況：

「日本ストックホルム青少年水大賞」は、20歳以下の高校・高等専門学校の生徒または生徒の団体による水環境に関する調査研究活動および調査研究にもとづいた実践的活動を表彰するもので、その受賞者は毎年夏にストックホルムで開催される国際コンテスト「ストックホルム青少年水大賞(SJWP)」に日本代表として参加することになります。

昨年の日本代表である静岡理工科大学静岡北高等学校科学部水質班は、「巴川水域環境研究～ホテイアオイのつくるバイオループ～」と題して30ヶ国からの代表に混じって堂々と研究成果を発表し、審査員の強い関心を呼びましたが、惜しくも受賞を逃しました。

本年は、全国13校（関東5校、近畿2校、中国2校、四国2件、九州1校、沖縄1校）、15団体から応募がありました。いずれも高校生らしい身近な水環境を対象にした力作ぞろいの自主研究でした。

審査経緯

審査は、5人の委員からなる審査部会において、ストックホルム青少年水大賞世界大会の審査基準に従って、厳正に行われました。この審査基準は、妥当性（水環境がかかえる重要な問題に的確に取り組んでいるか)、創造性（問題提起や問題解決の方法、実験・調査やデータ解析の方法に創造性がみられるか)、方法論（明確な問題意識のもと作業計画が適切であるか)、テーマに関する知識（既往研究のレビュー、参考文献、情報源、用語の理解等が十分か）の4項目からなります。

審査は2段階で行われました。まず審査員がそれぞれの専門的見地から行った書面審査の結果を持ちよって審議して、上位4チームを選びました。次にこの4チームから、英語による要旨発表及びパワーポイントを用いたプレゼンテーションを聴取したうえで質疑を行い、慎重な協議を経て「日本ストックホルム青少年水大賞」及び「優秀賞」の授賞団体をそれぞれ選定しました。

審査結果と授賞理由

2011日本ストックホルム青少年水大賞に輝いたのは、「水環境における外来種問題のネットワーク構築」と題する調査研究を行った、神奈川県伊勢原市にあります向上高等学校生物部（代表：緒方大地、青木景、中島美貴、指導教諭：園原哲司）です。

徹底したフィールドワークを基礎に、相模川における準絶滅危惧種のマシジミを駆逐する外来種タイワンシジミの分布を詳細に調べ、ホタルの幼虫放流という環境保護活動が、その主な原因であることを初めて突き止めました。

さらに、全国的にタイワンシジミに関する情報がきわめて不足している現状をふまえ、同校生物部がキーステーションとなって全国の博物館、内水面試験場などの試験研究機関からタイワンシジミの生息情報と標本を集約し、北海道以外の全ての日本の地域でタイワンシジミがすでに定着していることを明らかにしました。同様の手法を用いてゲンジボタルの餌であるカワニナと競合する外来種コモチカワツボ等の分布域の特定にも大きな成果をあげております。

このように同校生物部は全国の「水辺の外来種の情報センター」としての地位を築きつつあり、今後は全国の夥しい数の高等学校生物部間のネットワークを構築したいと強い意欲を示しています。

こうした外来種問題に挑む地道な調査研究と全国情報ネットワーク構築の活動は高く評価されるものであると評価し、日本ストックホルム青少年水大賞を授与することとしました。

優秀賞に輝いたのは、「『蘇れ、山口県のオオサンショウウオ』―川の守神オオサンショウウオと人間の共生に関する基礎的研究」と題する調査研究を行った、山口県防府市にある学校法人高川学園中学・高等学校科学部（代表：竹重美咲、隈井光砂、横山爽子、指導教諭：村田実）です。

生きた化石として特別天然記念物に指定されているオオサンショウウオの、山口県での生息分布はほとん

ど不明で学術的研究も遅れていました。

同校科学部は捕獲した固体にマイクロチップを埋めて固体識別できるようにし、その繁殖等の生息環境の実態を明らかにしました。この成果をもとに、河川整備の望ましいあり方について重要な提言を行い、さらに野生動物を「国宝の仏像」のように扱う環境保護のあり方にも、鋭い疑問を呈しています。

こうした同校の実証的な調査研究と、それをベースにした提言活動は、今後とも河川環境を保全するための総合的な体制整備に大いに寄与すると期待されることから、優秀賞を授与することとしました。